

皆様、おはようございます。

イースター、主のご復活、おめでとうございます。

今日私たちは、礼拝の後2曲の賛美歌を歌いますが、その歌詞はとても味わい深いものがあります。

「忘れないで」 「友よ歌おう51番 山内修一 1972」

忘れないで いつもイエスさまは
君のことを みつめている
だからいつも 絶やさないで
胸の中の ほほえみを

だけどいつか 激しい嵐が
君のほほえみ 吹き消すでしょう
だからいつも はなさいで
胸の中の みことばを

忘れないで 悲しみの夜は
希望の朝に かわることを
だからすぐに とりもどして
いつものきみの ほほえみを

Footprints(あしあと) 作詞 竹田しのぶ 作曲 土屋たまみ
原作(詩) マーガレット・F・パワーズ

主と私で歩いてきたこの道
あしあとは二人分
でもいつの間にか一人分だけ
消えてなくなってしまった

主よ あなたはどこへ
行ってしまったのですか
私はここにいるあなたをおぶって
歩いてきたのだ
あなたは何も恐れなくてよい
私とともにいるから

「忘れないで 悲しみの夜は 希望の朝に かわることを」

まさに失意の中にいる女性たちでした。しかし彼女らはいたずらに悲しみにふけろうとはせず、主への感謝の思いにあふれて、高価な香料を用意して、イエス様の死臭を取り除くため、朝早く、太陽が昇る暁が来るや否や家を飛び出してイエス様のお墓に行きました。そこで事件が起こりました。

- 1 週の初めの日、夜明け前に、女たちは用意しておいた香料を携えて、墓に行った。
- 2 ところが、石が墓からころがしてあるので、
- 3 中にはいってみると、主イエスのからだが見当らなかった。

ところが大きな墓の石は転がされていました。そこは番兵が番をしていたはずでした。威信をかけて封印までしてあったのに、このありさまでした。

マタイ 27:62 あくる日は準備の日の翌日であったが、その日に、祭司長、パリサイ人たちは、ピラトのもとに集まって言った、

27:63 「長官、あの偽り者がまだ生きていたとき、『三日の後に自分はよみがえる』と言ったのを、思い出しました。

27:64 ですから、三日目まで墓の番をするように、さしずをして下さい。そうしないと、弟子たちがきて彼を盗み出し、『イエスは死人の中から、よみがえった』と、民衆に言いふらすかも知れません。そうすると、みんなが前よりも、もっとひどくだまされることになりましょう」。

27:65 ピラトは彼らに言った、「番人がいるから、行ってできる限り、番をさせるがよい」。

27:66 そこで、彼らは行って石に封印をし、番人を置いて墓の番をさせた。

使徒 2:22 イスラエルの人たちよ、今わたしの語ることを聞きなさい。あなたがたがよく知っているとおりに、ナザレ人イエスは、神が彼をとおして、あなたがたの中で行われた数々の力あるわざと奇跡とするしにより、神からつかわされた者であることを、あなたがたに示されたかたであった。

2:23 このイエスが渡されたのは神の定めた計画と予知とによるのであるが、あなたがたは彼を不法の人々の手で十字架につけて殺した。

2:24 神はこのイエスを死の苦しみから解き放って、よみがえらせたのである。イエスが死に支配されているはずはなかったからである。

弟子たちからすれば、イエス様は時の支配者階級の人たちとことごとく関係を悪くし、命を

狙われ、敗北してしまった。自分たちの先生は、戦ってはならない敵と戦って、滅ぼされてしまったとも考えてしまったのではないのでしょうか。

ルターは41歳の時にカタリーナ・フォン・ボラという15歳年下で26歳の元修道女と結婚し、三男三女をもうけました。家庭は円満で、ルターは妻のカタリーナに大いに助けられ、励まされながら宗教改革の戦いを続けたのです。

ある時ルターは、宗教改革運動における激しい迫害のために意気阻喪して、希望を失いかけていました。その時、妻のカタリーナが書齋に黒い喪服を着て黒い帽子をかぶって入ってきました。ルターは驚いて、「誰が亡くなったのですか」と尋ねますと、カタリーナは「神様です」と答えました。「何、神様だって、バカなことを言うな」とたしなめると、彼女は「もし私たちの神様が生きておられるなら、なぜあなたはそんなにまで失望されるのですか。私たちは生ける神様の御力にすがって、どこまでも戦ってまいりましょう」と励ましたそうです。（「恵みのひとしづく」ホームページより）

しかし私たちの神様は生きておられます。

「そのかたは、ここにはおられない。よみがえられたのだ」

そういうお方でいらっしゃいます。

女性たちはイエス様のお身体がないのを見て、途方に暮れていました。これは、青天の霹靂があり、途方に暮れ、心に満たされない欠乏や喪失、孤独の気持ちが押し寄せ、確信が持てず、あやふやで当てにならない、不安な気持ちになったり、混乱と不安、動揺に悩まされる状態です。そこに突如として天使が現れ、何のことか分からず、恐怖におののき、恐れあまり、目の前で起こっていることが受け入れられず、顔を上げることもできない…。現実逃避をしたくなるほどの恐怖と失意がそこにはあります。

だけどいつか 激しい嵐が
君のほほえみ 吹き消すでしょう
だからいつも はなさいで
胸の中の みことばを

忘れないで 悲しみの夜は
希望の朝に かわることを

忘れないで いつもイエスさまは
君のことを みつめている

だからいつも 絶やさないで
胸の中の ほほえみを

宗教改革者のマルティン・ルターは、ある時、幻の内に、サタンの試みを受けました。サタンは、白い壁一面に、ルターが犯した罪を、洗いざらい、書き上げたそうです。そこには、自分が忘れていた罪も、記されていました。ルターは驚き、恐れしました。しかし、ルターは、サタンに対して、こう言ったそうです。

「お前が示した罪は正しい。まったく私はそういう者だ。しかし、お前が見逃していることがある。それは、イエス・キリストの血によって、私の罪がすべて赦されたことだ。サタンよ、引き下がれ」。そう言って、インクを壁に投げつけたそうです。

(茅ヶ崎恵泉教会ホームページより)

「そのかたは、ここにはおられない。よみがえられたのだ。まだガリラヤにおられたとき、あなたがたにお話しになったことを思い出さない。」

答えは御言葉の内にあります。主イエス様はすでに予告をしておられました。

7 すなわち、人の子は必ず罪人らの手に渡され、十字架につけられ、そして三日目によみがえる、と仰せられたではないか」。

8 そこで女たちはその言葉を思い出し、

9 墓から帰って、これらいっさいのことを、十一弟子や、その他みんなの人に報告した。

だけどいつか 激しい嵐が
君のほほえみ 吹き消すでしょう
だからいつも はなさないで
胸の中の みことばを

激しい嵐や試みの中、私たちが心の中の御言葉を思い起こせなくなる時、そして生ける神様をあたかも死者の中に、力なき者の中に見つけ出そうとするとき、私たちは希望も力も失ってしまいます。

そんな時、私たちは繰り返し、繰り返しこの御言葉を思い起こしたいのです。

「あなたがたは、なぜ生きた方を死人の中にたずねているのか」

「あなたがたは、なぜ生きた方を死人の中にたずねているのか」と。

主と私で歩いてきたこの道
あしあとは二人分
でもいつの間にか一人分だけ
消えてなくなってしまった

主よ あなたはどこへ
行ってしまったのですか
私はここにいるあなたをおぶって
歩いてきたのだ
あなたは何も恐れなくてよい
私とともにいるから

私たちの問題、それは心細くなり、いつもお側近くにおられるお方を疑い、「あなたはどこに行ってしまったのですか」と嘆き悲しみ、途方に暮れてしまうことです。

イザヤ 46:1 ベルは伏し、ネボはかがみ、彼らの像は獣と家畜との上にある。あなたがたが持ち歩いたものは荷となり、疲れた獣の重荷となった。

46:2 彼らはかがみ、彼らは共に伏し、重荷となった者を救うことができず／かえって、自分は捕われて行く。

46:3 「ヤコブの家よ、イスラエルの家の残ったすべての者よ、生れ出た時から、わたしに負われ、胎を出した時から、わたしに持ち運ばれた者よ、わたしに聞け。

46:4 わたしはあなたがたの年老いるまで変らず、白髪となるまで、あなたがたを持ち運ぶ。わたしは造ったゆえ、必ず負い、持ち運び、かつ救う。

46:5 あなたがたは、わたしをだれにたぐい、だれと等しくし、だれにくらべ、かつなぞらえようとするのか。

46:6 彼らは袋からこがねを注ぎ出し、はかりをもって、しろがねをはかり、金細工人を雇って、それを神に造らせ、これにひれ伏して拜む。

46:7 彼らはこれをもたげて肩に載せ、持って行って、その所に置き、そこに立たせる。これはその所から動くことができない。人がこれに呼ばわっても答えることができない。また彼をその悩みから救うことができない。

46:8 あなたがたはこの事をおぼえ、よく考えよ。そむける者よ、この事を心にとめよ、

46:9 いにしえよりこのかたの事をおぼえよ。わたしは神である、わたしのほかに神はない。わたしは神である、わたしと等しい者はない。

46:10 わたしは終りの事を初めから告げ、まだなされない事を昔から告げて言う、『わたし

の計りごととは必ず成り、わが目的をことごとくなし遂げる』と。

女性たちは起こったことの一部始終を話しました。途方に暮れていた時に、どうしようもない悲しみと喪失感の中に、輝くみ衣の天使がおり立ってイエス様が語られたみ言葉を思い出させてくれたことを語りました。それを聞いた弟子たちはどう思ったのでしょうか。

11 ところが、使徒たちには、それが愚かな話のように思われて、それを信じなかった。

愚かなこと、たわごと、空っぽなこと、ナンセンスなこととってしまったのです。本当に、鈍い、不信仰の者たちです。

マルコ 9:16 イエスが彼らに、「あなたがたは彼らと何を論じているのか」と尋ねられると、
9:17 群衆のひとりが答えた、「先生、口をきけなくする霊につかれているわたしのむすこを、こちらに連れて参りました。

9:18 霊がこのむすこにとりつきますと、どこでも彼を引き倒し、それから彼はあわを吹き、歯をくいしばり、からだをこわばらせてしまいます。それでお弟子たちに、この霊を追い出してくださいのように願いましたが、できませんでした」。

9:19 イエスは答えて言われた、「ああ、なんという不信仰な時代であろう。いつまで、わたしはあなたがたと一緒におられようか。いつまで、あなたがたに我慢ができようか。その子をわたしの所に連れてきなさい」。

ヨハネ 20:27 それからトマスに言われた、「あなたの指をここに付けて、わたしの手を見なさい。手をのぼしてわたしのわきにさし入れてみなさい。信じない者にならないで、信じる者になりなさい」。

20:28 トマスはイエスに答えて言った、「わが主よ、わが神よ」。

20:29 イエスは彼に言われた、「あなたはわたしを見たので信じたのか。見ないで信ずる者は、さいわいである」。

マルコ 4:37 すると、激しい突風が起り、波が舟の中に打ち込んできて、舟に満ちそうになった。

4:38 ところが、イエス自身は、舳の方でまくらをして、眠っておられた。そこで、弟子たちはイエスをおこして、「先生、わたしどもがおぼれ死んでも、おかまいにならないのですか」と言った。

4:39 イエスは起きあがって風をしかり、海にむかって、「静まれ、黙れ」と言われると、風はやんで、大なぎになった。

4:40 イエスは彼らに言われた、「なぜ、そんなにこわがるのか。どうして信仰がないのか」。
4:41 彼らは恐れおののいて、互に言った、「いったい、この方はだれだろう。風も海も従わせるとは」。

私たちは、「あなたがたは、なぜ生きた方を死人の中にたずねているのか。

24:6 そのかたは、ここにはおられない。よみがえられたのだ。まだガリラヤにおられたとき、あなたがたにお話しになったことを思い出さない。

24:7 すなわち、人の子は必ず罪人らの手に渡され、十字架につけられ、そして三日目によみがえる、と仰せられたではないか」。

との御言葉を思い起こしたいと思います。

御言葉は、たわごとでも虚しいことでもなくて、現実を超えた現実であることを信じ、墓の中に、死者の中にはおられず、今も生きておられるイエス様をいつも信じて、途方に暮れる時も、先行きが不透明な時も、恐怖の時も、生きた方を死人の中に探さず、生きておられ、助けて救い出してくださるお方と、大きな信仰をもって進ませさせていただきたいと願います。

◇祈禱；天の父なる神様、今日の礼拝を感謝します。私たちはすぐに悩み
に閉じ込められ、途方に暮れ、人生の中立ち尽くし、恐怖におののく
ものですが、「なぜ、生きておられる方を死者の中に捜すのか。

あの方は、ここにはおられない。復活なされたのだ」との力強いおこ
とばを、本当にありがとうございます。「神はこのイエスを死の苦しみ
から解放して、復活させられました。イエスが死に支配されたままでお
られるなどということは、ありえなかったからです」との御言葉の通り
イエス様をよみがえらされた神様の復活の御力を今週も私たちにお現
し下さい。私たちの家族と、地域の方々を祝福して下さい。主イエス様
の御名によって祈ります。アーメン